
some months off

三沢 馬太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

some months off

【Nコード】

N9712Q

【作者名】

三沢 馬太郎

【あらすじ】

同僚の村田がある晴れた午後から行方が知れなくなって……

「古の人混芒の中に在れば、一世と与に澹漠を得。是の時に当りては、陰陽は和静し、鬼神は擾れず、四時は節を得、万物は傷れず、羣生は夭せず、…此れこれを至一と謂ふ」―「繕性」『莊子』

同僚の村田がある晴れた午後突如叫び上がり、文字通りオフィスから駆け失せその後行方が知れなくなっただけというもの、同じ社内ネットワーク担当の五十嵐俊平の仕事は山のように増えた。

それこそ雪崩のような量の引継ぎ案件が日々容赦なく俊平の身に降りかかり、上司先輩の無理解と無能さも手伝って、終いに俊平がノイローゼになり始めた。

夜眠れず、深夜過ぎの帰宅でも明け方必ず目醒める。充血した目で出勤し、日中は居眠りに抗えず…といった日が続いた。疲労はピークに達し、俊平の思考は昼夜を問わず霞がかかったように麻痺し始めた。

「休みてえ…」しかし同業他社と一刻を争う開発競争を続けるこのモバイル業界において、営業部や商品部からやれメールの調子が悪いから来てくれといった救援要請はしょっちゅうで、俊平のような裏方が休むと営業活動自体が滞りかねない。

その日も、あと三十分程で日付が変わろうかというサーバー室内で、俊平はたった独り、社内LAN監視用モニターを前に船を漕いでいた。外にはやはり煌々と灯りをともしたビルが林立している。

―…おい。

俊平は驚き、涎の付いた顔を上げる。確かに俊平に呼びかけるような声。周囲を見回す。無機質な漂白光に溢れた、冷たい室内には俊平以外、誰の影も見えない。サーバーの冷却ファンの唸りだけが、微かに低く鳴っている。

「おい」今度はリアルに聞こえた。

「ひっ」俊平は飛び上がった。「誰だ？」

「おれだよ、おれ」耳に、というより頭の中に直接響いてくるように感じられる、聞き覚えのある声。

「…村田!？」俊平は四周を見回し呟いた。

「おう。そうそう。久しぶり」ちよつと恥ずかしそうに、頭の中の声が言う。

「お前…！ 何やってんだ？」

「ああ…ちよつとした、“楽園”にいる」

「“ラクエン”？」やはりまだ、頭がおかしいのだろう。「何言っ
てんだ？ それより、どこに居るんだよ」

「とにかく、招待メール送るから、それに返信してくれよ」

「“招待メール”って…ますますワケ分かんねえんだけど」

「詳しいことは、その後分かんと思うから」そう言い、村田の声は遠ざかった。

依然として疲労でぼんやりした頭のまま、慌ててメールを開く。

SNSのような招待メールが届いていた。件名は『楽園リゾート
癒安クラブ』とある。

指示に従い、入会手続きを済ます。画面に南洋の島嶼の風景が出てきた。不思議なことに、眠気が先ほどより倍加し、思考がますます混濁している。

「畜生、やべっ…」眠気に下がる頭を必死に持ち上げようとしたその瞬間、

突如、画面から光が横溢し、俊平の視線はそこへ吸い込まれるように収斂してゆく。

俊平の意識は、画面の中、南洋の島の上に在った。

先程のモニター上の風景が眼前に展開される。容赦なく浴び注ぐ強烈な陽光とまばゆいばかりの白い砂浜。透き通ったエメラルド・グリーン
の海洋そして濃紺の空、空、空。

—ようこそ…。

また村田の声。しかも今度は空の真上、天上から降ってくるよう

に聞こえる。空全体が音響装置のようでもある。

「ここは…？」

―PCの中。所謂「ヴァーチャル・ワールド」みたいなもん。よく聞いたことあるだろ？ 漫画とかゲームでさ。あれだよ。五十嵐は今、デジタルのビットの世界にいるんだよ。最近、特別に疲れたったろ？ だから、ここでゆっくりするといいよ。ここはデジタルの「楽園」、リゾート地だから…。

「お、おい」俊平が更に問いかける前に、村田の声は風に乗って消えていった。頭には、いつも突然夢想に駆られては人の話を全く聞かず、狂ったように話し続ける村田の歓迎すべからざる性癖がまざまざと甦っていた。

―分かってもらえるか？ 言ってみれば脳の中と同じ状態ってことかもしれない。まあ、そこでだ…この世界、そうして「文字」でものがとが見えている状態ではまだだめなんだ。五十嵐にも、精神を統一し、おれの居る一段上の高み…何と言ったらいいんだろう？…言うなれば「道」の流れる場所まで来て欲しいんだ。

「どうということ！？」 神仙思想を語っては、変人度をますます増していた村田。

―まあ、まずは心を落ち着けるんだ…。せつかく浮世の憂さを忘れ得る楽園に来たんだ。無心になれ。金とかより楽に生きようとか、そんなことも考えるな。「リラックスしよう、しなければならぬ」…そんな気持ちさえも持つんじゃない。とにかく来れば分かる。おれも来たばかりだが、いいぞ、この世界は…。

俊平が言葉なくまごついていると、

―喝アツ！ とにかく、今から瞑想に入ってくれ。頼む。お前の為を思って、招待までしたんだ。まずは無心になるんだ。何も視ず、何も聞かず…必ず静に、必ず清に…。

「わ、わかった」俊平は目をつむった。

再び原初的なドラムの連打が天から鳴り響き、その音が近づくにつれ、俊平の心には洗われるような清浄さが訪れ、次第に覚醒的な

静かな熱気が胸の底から沸々と湧いてきた。

瞑想を続ける。高揚感が背筋を這い登ってくる。自分が一個の人間として楽をしようという気持ちではなく、在るがままの自分を自然の中にただ只配置してやろう、そんな自然な気持ちになってきた。目眩を起こすような精神の不安定な揺らぎももう無い。

—いいぜいいぜ、完璧だ。こんなに早く「道」を見つけるとは…デキる奴とは思ってたけど。

更なる高揚感が俊平を包む。ヒエロニムス・ボッスの昇天テーマの絵のように、天の高みに登る、いや引き上げられる気分。

—樂園だぜ…まさに、ここは心の樂園だ…。

村田の呟き。

気がつくと、俊平は天の高みにいて風の一部となっている。周りを見回すと、自身の身体が見えない。身体と意識はすぐそこにあるのだが、身体が透明になったと言った方が良さそうか。耳元でガヤガヤと、無数の、それこそ無限に近い人々の呟きが聞こえる気がするのだが、それはそれらの存在の意識そのものであり、実際にはつきり声が聞える訳ではない。

—うわっ…楽チン…何て安らかなんだ…。

実際それは、俊平がかつて経験したことのない、静かな、真の落ち着いた安らぎだった。

風に乗るこの世界に軽やかに、漂い流れる感じ。

—だろっ？

—わっ！なんだ、お前、ずっとここに居たのか？

村田に耳元で囁かれたような感じがして俊平は叫ぶ。しかし今や、声も無い。それは、意識の中での叫びだった。強大な風のような、ある意識の大いなる流れに身をまかせ、いやその流れそのものになった気分があるのみ。

—ここに「居た」っていうよりは、お前が「おれたち」の一部になった、と言った方が正確かも。

—「一部」って…。

俊介の意識に、互いの肉体が癒着して生まれた双生児が想起された。しかもその顔は俊介と村田だ。

―お前は今、大いなる「流れ」に乗った。だから、ここにはおれとお前だけじゃなく、無数の人の意識が犇んでいる。みんな、今の生活に不満を持っていたり、この社会に対して不快さや不安、絶望を感じている人たちだ。おれもそうだったし、お前も…そうだろ？

俊平は否定できなかった。

―この「楽園」コミュニティは、そんな人たちの意識の集まりと言った方がいいかな。おれも元々は、このコミュニティ内で更に上の先輩会員から、ある日招待メールを受け取ったんだ。

―なるほど。辛い現実世界を忘れるためにこのコミュニティがあり、ここに来れば、このようにリラックスして大河の流れのように安らぐことができる、ってことか。ユングの集合無意識のようなものかな。

―よく分からんけど、そのようなものかもしれない。

―まあ今は、とにかく楽し、幸福感が湧いてきて仕方ないんだけど…。

俊平たちの集合無意識の大河はこのヴァーチャルなネットワークの世界を飛び、流れ、浮遊した。いまや、この社内LANシステム中の大気全体にも彼らの意識は融合・浸透し、この大気が彼らの意識そのものになっているとも言えた。

多くの社員のモニターの裏から現実世界を覗く。たいていの社員は居なかったが、課長が残っていた。デスク上に伏し失神したように眠っている。開発室の後輩の山本は泣きながら夜食の即席ラーメンを啜っている。モニターは現実世界とこの俊平たちの世界との窓と言えた。

―おお、無線LANの「流れ」に乗ったぞ。

潮流のような巨きなうねりが押し寄せ、俊平たちの意識はヴァーチャルな楽園世界すなわちケーブルの外、実際のオフィス空間に飛

び出す形となる。

俊平たちの意識は、より茫洋たる大海のような意識の空間に流れ出た。いつものオフィスがあり、街の灯りがある。巨視的な視点から、この世界を眺めることができた。しかし彼らの意識はこの現実世界の底部を流れる、より混沌とした相対的な気の流れのようなものと相通じ融合し、この世界や宇宙の全てのものと繋がっていた。言うなれば彼らは宇宙のどこにでも偏在しているとも言えた。実際に見てはいないのだが、実家の親の様子もすぐ分かるし、受付の可愛い相田さんの寝顔も手に取るように分かるだろう。

参加している意識の密度のようなものが増し、周囲がより騒がしくなってきた気がする。

―なあ…このままおれたち、どこへ行くんだ？

―知らん。この「外」の世界まで出てきたのは、おれも初めてなんだ。何かに導かれてるのかもしれないし。

―何だ、それは？

「神か？」そう言おうとしたが、次第に自意識が薄れ、村田の考えと自分の考えとの境界さえも混じりあい、はつきりしなくなってきた。眠りにおちる直前の、朦朧とした霞のような意識の混濁と言った方がいいだろうか。

―選ばれてコミュニティに入り、時が熟しこの意識の束に合流し、ここにいる…なぜ？ なぜなんだ…？ 考えてみれば、かなり不可解な状況。

地球規模、宇宙規模の、ユビキタスな気のうねり。彼らに共通するのは、この現実世界からの離脱表明。

―それが共通項だとしたら…。この世でもないどこかへ行きたいという願望が皆にあつたってことか…。

もう俊平でも村田でもない意識は、いつしか宇宙空間を漂っている。

目の前には、道筋のような気の軌道がはつきりとあり、宇宙空間

にぽっかり口を開けたブラック・ホールのような穴に続いていた。

―まさか、おれたちは、自分から「離脱したい」と願っていたおれたちは、逆に何かに選ばれて、「離脱」させられようとしてるんじゃない…？ 神？ 神というものが存在するなら…？

自我がかなり薄まった俊平たちの遠い記憶に、「削除」というゴミ箱の形をしたアイコンが想起された。そして、昔聞いた「リストラ」という言葉も。

ブラック・ホールの奥底はまさに無限の深みを極めており、そこに入ったら最後、永遠の虚無に放り込まれ、二度と出て来られないように感じられた。

俊平、いや取り込まれた俊平の意識の残滓は一瞬、自分たち世を厭う者たちの願望、いやそのような存在を嫌う世の意識が一つになりこの流れをつくり、この世からの抹殺を遂行しているのではないかという恐れを抱く。

―なあ…

―おれたち、どこへ行くんだろうな…？

―知るか、アホ…。

しかし、世界中から選ばれた意識によって形成された集合無意識は、いまや去勢された牡牛のように既に自我が消え去り、完全な無私の気の塊となり果てていた。恐怖も、欲望も、怒りも、喜びも無い。いや、それらを超越している。

―まあ、どうでもいいけどな…。

―ああ…もう何も考えたくない…。

―もう…何もかも…

―何もかも、どうでもいい…。

意識は漂う。宇宙空間を一つの大きなうねりとなり、そしてまっすぐに、漆黒の穴へと流れ込んでいった。

（後書き）

2007年12月2日に書いた作品です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9712q/>

some months off

2011年2月16日22時10分発行